

領域「環境」における幼児の季節の捉えに関する研究

—幼児の語りの分析より—

A Study of the Seasonal Perception of Infants in Regional Environments

—Analysis of the Narratives of Young Children—

佐藤 智恵

要 旨

本研究の目的は、幼児が何に注目をして季節を感じているのかということ、幼児の語りの分析から明らかにすることである。方法は、絵本の中から9場面を選出し年長児に提示し、どのように季節を捉えたかについて個々の語りの聞き取りを行い、質的に分析を行った。その結果、幼児の季節の捉えには1. 色による季節の判断がある、2. 衣類による季節の判断がある、3. 季節の固定化されたイメージがある、4. 自己の経験から生じた季節の判断があるという4点が挙げられた。

キーワード：領域「環境」 季節の捉え 幼児の語り

1. 問題と目的

保育者は、保育実践を行う上で季節を非常に重視しており、活動、遊びや行事などで計画的に取り入れ、幼児が生活の中で自然と季節感を感じられるように環境構成が整えられている。保育実践において重要視されている季節であるものの、これまでの研究でそれを扱ったものとしては、わずかに見られるのみである(肝付, 2011・正岡ら, 2015・小澤, 2009)。肝付(2011)と小澤(2009)は、音楽活動の中での季節を題材としたものについて研究を行っている。肝付(2011)は、日本の音楽は、海外と比べ、季節を感じさせるような音楽が多いにも関わらず、大人にそのことが意識されていないことを指摘し、保育実践が商業的な季節のイベントに流されるのではなく、文化の伝承を行っていくことの重要性を説いた。小澤(2009)は、幼稚園・保育所の実習先で、どのような「季節の歌」や「生活の歌」が歌われているかを調査し、園の中では季節感や行事を大切に子どもを育てる選曲がなされていることを述べた。正岡ら(2015)は、幼稚園・保育所の壁面構成の実態把握のための調査を行い、子どもの作品や行事の他に、季節を取り入れたものが多かったことを報告している。

横井ら(2013)は、ある幼稚園・保育園の中で季節感がどう指導されているかの調査を行っている。対象となった幼稚園では生活と教育が重なり合って存在するため、指導計画であえて季節感の指導を強調することはなく、季節感に関して生活の中で教師の発言が多いと予想されること、ある保育園においては季節行事を通して保育が展開され、その中で季節感の指導も行われていたと述べ、行事を通して季節感、自然感だけでなく、身体や社会性なども身につけようとしていることを報告している。

そのような中、幼児が季節をどのように捉えているのかということ扱ったものは見られない。幼児自身が季節をどう捉え、なぜそう考えるのかという視点で明らかにすることは、保育実践の中で季節を子どもにどう伝えていくのかという点で意義のあることだと考える。

本研究では、幼児の語りから季節の捉えを明らかにする。幼児の語りということで、信憑性に欠けるということも考えられる。しかし、例えば子どもの就学移行の問題では、子どもだからこそ語れる出来事(Ledgerら, 1998; Griebel & Niesel, 2000; Smithら, 2000; Einarsdottir, 2007)があるとされ、子どもの声(children's voice)から子どもにとっての就学移行を明らかにすることの必要性が示されている。このように季節感に関しても、幼児自身がどう捉えているのかを明らかにする際に、幼児だからこそ語れる出来事があるのではないかと考える。そこで本研究では、幼児が何に注目をして季節を感じているのかということ、幼児の語りの分析から明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 方法

本研究では、子どもの声の聞きとりを行い、語りを質的に分析することで、保育の中で幼児が季節感をどのように身につけているのかを明らかにする。方法は、四季が読み取れる絵を子どもに提示し、その場面がどういう季節か、なぜそう思ったかの聞き取りを行った。

子どもに提示した絵は、四季を描いた絵本の一場面を写真に撮り、A4コピー用紙に印刷をしたものをラミネートした。絵は、絵本『ばばあちゃんのマフラー』(さとうわき作 1997 福音館書店)から抽出した。この絵本では、12か月の出来事が1か月ごとに見開きページ1枚ずつに示され、四季を表す風物詩(花火、焼き芋など)や植物などが描かれている。見開き12ページのうち、各季節から2場面ずつ、梅雨の時期を描いた1場面も加え計9場面を提示資料として用いた。

この絵本を提示資料に選択した理由は、1枚の絵の中に多くの情報が細かく描かれていることから、季節に関して幼児がいろいろな視点から語ることが可能と考えたからである。

調査は、園内の1室(事務室)で個別に実施し、室内遊びをしている幼児たちに担任が声をかけ、1名ずつ部屋に入ってくるようにした。部屋には、机を設置し、筆者と向かい合って座るようにした。幼児の語りは、本研究の分析のためだけに使用すること、個人が特定されないように個人情報に留意して使用することを依頼時に園長先生に説明し、承諾されたためICレコーダーに採録した。

2. 対象者

対象者は、園長先生に研究目的を依頼し承諾が得られたA市内の私立A保育園に在園する年長児21名である。

3. 実施期間

20XX年10月4日、9日(14:30~17:00)の2日間である。幼児1人のインタビューにかかった時間は、最短で9分、最長で20分間であった。

4. 質問内容とその方法

幼児には、入室後緊張がほぐれるように、調査と直接関係ない会話を短時間行った。また調査日までに短時間ではあるが保育室を訪問し、一緒に過ごす時間を設け、なるべく緊張感や警戒心が少なくなるようにした。幼児には、意欲が持てるように、「これからクイズをするよ」と話した。

質問内容としては、はじめに季節の理解度の有無を調べた。春、夏、秋、冬それぞれの季節について会話をし、「春=暖かい」「夏=暑い」などが理解できているかの確認を行った。その後、一枚ずつ絵を提示し、「この絵は春かな、夏かな…」という質問を行った。春、夏などという言葉と実際の季節が結びついていないと思われた幼児には、「暑いときかな、涼しい時かな……」というような質問を行った。そして、絵のどこを見てそう感じたかという理由をなるべく多く語れるように、また幼児が過去の経験や知識を十分に話せるようにゆったりと時間を設けた。

幼児が語った内容についての正誤を問わず、肯定的な相槌をうったり、「大正解」「すごいね」などの言葉をかけた。また不明な時に「わからない」と言えるように、「ひっかけ問題として、季節が関係ないような絵も、中に入れている」ことを初めに伝えておいた。

5. 分析方法

ICレコーダーに採録したそれぞれの語りを全て書き起こし逐語録を作成した。その後、それぞれの場面ごとに幼児の季節の捉えが現れている語りについて質的に分析を行った。

対象児21名のうち、春・夏・秋・冬という言葉と季節の特徴が一致していたものは12名であった。その一部が一致しているものが7名、残りの2名は四季があることや、季節の特徴というものを理解していない状態であった。本研究では幼児が季節をどのように捉えているかということを描き出すことを目的とし、全ての幼児の語りを対象として分析を行う。また「季節に関する正しい理解」を明らかにしようとするものではないため「正答」「誤答」には焦点化しない。なお、本研究では、全ての項目で全員の語りを分析の対象としたが、紙面の都合上、特徴的な語りとなっているものなど、語りの一部のみを記載している。

Ⅲ. 結果と考察

1. 幼児の季節の捉え方

はじめにそれぞれの提示場面について、幼児がどのような認識をしていたかを語りから明らかにする。季節の名称を言葉にしているも、内容が別の季節のことについて語っている場合は、内容の項目に含めるものとする。

結果を表1に示す。幼児の季節の捉えについては、あまり違いが見られないもの（場面5・8）、半数程度の幼児が同じように捉えているもの（場面1・2・3・6・9）、ばらつきが見られたもの（場面4・7）があった。また、3分の1程度の幼児が「分からない」と答えたもの（場面7）もあれば、分からないと答えたものが0～2名など少人数であった場面も見られた（場面2・3・5・8・9）

以下、このことから考えられることを記す。まず場面5では、スイカやひまわりなど幼児になじみの深い植物や、大きく太陽が描かれていたことから季節の認識がしやすかったことが挙げられる。場面8も画面に大きく枯れ木が描かれていることや、登場人物たちがマフラーをつけていることから、季節を認識したものが多かったことが考えられる。

次に、半数程度が同じ季節を答えた場面については、花火（場面1）、焚火（場面2）、桜の木（場面3）、雨（場面6）、枯れ草（場面9）など比較的季節を捉えやすい事物が描かれていたことがその要因として挙げられる。答えにばらつきの見られたものとしては、大きくリンゴの木が記されている場面4、ハンモックで登場人物たちが昼寝をしている場面7であり、これらは表現している季節の時期が幅広く、答えにばらつきが見られたものと思われる。詳細は次項より述べるが、例えば現在、リンゴは一年中スーパーなどで見られる果物であり、子どもはリンゴから季節を認識することが困難な状況にあると思われる。同様に場面7は、登場人物たちが緑生い茂る木陰でハンモックに寝ている場面であるが、そのような経験をしていない、或いは見たことがない幼児にとっては、ここから季節を感じ取ることが難しかった事が考えられる。

表1 幼児の季節の捉えについて

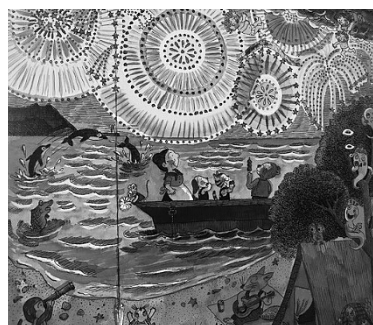
	春 暖かい時	夏 暑い時	秋 涼しい時	冬 寒い時	不明
場面1	1	12	1	4	3
場面2	0	4	6	10	1
場面3	10	4	4	3	0
場面4	3	6	6	1	5
場面5	0	17	1	1	2
場面6	1	1	1	13	5
場面7	7	3	3	1	7
場面8	0	0	2	18	1
場面9	3	2	11	4	1

ここからは、幼児の季節の捉えについて幼児それぞれの語りから検討を行う。

2. 場面1について

この場面では、画面の中で大きな位置を占めている花火から夏と考えたものが複数存在した(幼児I)。また、夏と答えたものについては、イルカやお化けなどがあるからと述べたものもある(幼児I)。中には、動物が食べている団子などといった非常に細かい部分に着目し、月見団子から秋を発想したもの(幼児J)、光を表現した部分を登場人物が汗をかいていると読み取りこの画面を夏だと考えたものもいた(幼児L)。花火があがり夜のため暗い場面になっていることから寒さを感じ、「黒い雲があると寒い」と話したものもいた(幼児O)。

*幼児I：ちょっとお祭り。花火がお祭り。夏かな…
保育園やったらお祭りは夏やからな。夏がついてるから「夏祭り」には。お団子は秋な感じやけどな。《お団子は秋なん?》なんとなく。そんな気がする。お化けはいつでも来るからな。お化けはハロウィンで10月やから。



*幼児J：秋やと思う。ここ見て思った(波の部分の絵を指さして)あと、だってお団子持ってるから。

*幼児L：ぼかぼかの時 え、なんか汗かいてるから。ここにシューっと。

*幼児O：……寒い時…う～ん…う～ん。雲とががあるからやと思う。《うん??どこ?》(上方の雲を指さす) 黒い雲があるから

「打ち上げ花火は見たことがあるが、こんなカラフルではなかった。」と語った幼児もおり、誇張された表現が幼児にとっては、花火と感じられなかったのかもしれない。A保育園に勤務する保育者の話によると、中秋の名月の頃に月見団子を作った経験があるということである。保護者とともに買い物をしたり、保育実践の中での経験がこのような認識につながっていると思われる。

3. 場面2について

この場面は、登場人物が落ち葉を集め、焚火を行い、焼き芋をしようとしているところである。また画面には、葉が落ちた枯れ木も記されている。幼児たちは、画面の中心にある焚火や、調査日の直前に園で行った芋堀りの経験から、なじみが深かった芋に注目する姿が見られた(幼児G)。

焚火をしていることから「寒いから火を焚いている」と考えるものもあれば（幼児O、G）、中には「火を焚いて熱くなった」経験を想起して話すものもいた（幼児L）。経験したことによる語りは、その時の煙たさや煙の匂いが伝わるような内容であった。大人にとっては「寒いから火を焚く」ということは当然のことであるが、幼児にとっては、焚火から発想が始まり、次に「焚火によって暑くなった自分」が思い出され、「暑い時」という語りになったと思われる。



経験した内容では、他にも「寒いから咳が出ている」（幼児L）。「春だからくしゃみがでる」（幼児J）、「テレビで観たこと」（幼児O）、「夕方が少し暑くなること」（幼児P）など自らの経験が豊かに語られた。寒い時に咳が出たこと、花粉症などが原因のくしゃみなど実際に経験したことを基にして、季節を感じている様子である。夕方になると暑くなるということが、こういった状況かは不明だが、夕方、保護者の迎えを待ちながら戸外で元気に走り回った時に感じた暑さの経験なのであろうか。

また夕焼け空の色に着目し、秋や冬と答えた幼児もいた（幼児F、G）。地面が白く描かれていることを「雪」と考え、冬というものもいた（幼児N）。色の効果が、幼児の季節の捉えに影響を与えていることがうかがえる。

調査対象児の中では、多くの幼児がこの場面を秋もしくは冬と感じていた。焚火、くしゃみ、雪などは対象児にとって秋冬を感じさせる固定化されたイメージのものとなっているようだ。

* 幼児F：秋 う～んだってな、秋に見えるもん。ここが（黄色やピンクの空を指さす）葉っぱも揺れとるし。

* 幼児G：冬かな。たき火しとるから。なんか、ここに赤いのとオレンジのがあるから、冬かなって思った。

* 幼児J：……先、秋って言った？《うん。涼しい方が秋や》秋か。春かな。くしゃみやっているから。うん。なんかここ。涼しくていい気持ちみたい。このキツネがなんかいい気持ちそう。

* 幼児L：アツイ時！火があるから。火が熱いし、火のところにずっとおったら目が痛くなる。火は寒い時にする。寒いから咳が出てる。鼻も出てる。

* 幼児N：冬。ここに雪とかがあったから。これお芋？お芋を焼いてる。

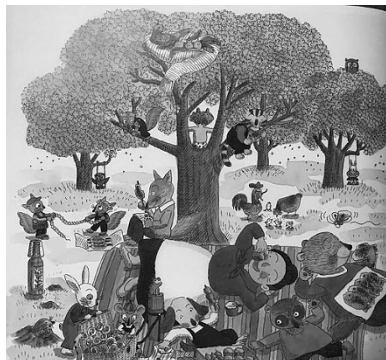
* 幼児P：えっと お掃除してる。ちょっとだけここにおひさまが出てから、夕方。だからちょっと暑そうな感じ。《夕方って暑いのか？》うん、夕方ってちょっと暑くなる。

* 幼児Q：冬やと思う。火燃やしてるから。寒いから。テレビでみた。木と葉っぱを燃やしてる。

4. 場面3について

この絵は、画面上方に大きく描かれた桜の木を印象的に捉えたもの（幼児A、P）と、敷物の上で寝転ぶ登場人物たちに思いを馳せたものがいた（幼児J、L、O、S）。

主人公たちが戸外で寝ているために、暖かい或いは暑い季節と捉えた語りが多く、秋冬といった寒い季節のこととは感じていないようであった（幼児S）。また、敷物の上で寝転ぶという行為から、家族とピクニックに行き野原に寝転んだ事などと結びつけ、自らの経験を豊かに語るものもいた（幼児J、L）。



一方、幼児Oのように、「動物が集まっていることでちょっと寒い」時期と認識したのももいた。理由を確認したが、それについての返答が得られなかったために、どのようなことを指しているのかは不明ではあるが、年末年始における親戚の集まりなどを想起したのか、少し肌寒い日に場面3のような経験があったのかもしれない。

また場面1では団子を食べている登場人物の存在から、「これは秋」と判断をした幼児が少なからずいたが、この場面では一人も存在しなかった。このことは、たとえ同じ事物を目にしても、最も印象深く残るものがその時によって異なることを物語っている。

* 幼児A：春だと思う。桜の木が咲いてるから。

* 幼児J：これは～夏。なんか寝るところが、なんか気持ちいくなって寝てるみたいやから。

《こんな風に寝たことある？》うんある。あの～お母さんたちと。

* 幼児L：あったかい時 なんか暑そうな気がする。桜のところとか。しかも、布団じゃなくて、えっと～こういうの敷いてるし（マットを指さしながら）。こういうのってあったかいんや。知ってる。寝たことあるから。

* 幼児O：……あったかい時か、ちょっとだけ寒い時。なんか、みんながお弁当食べてる時にな、動物とかおるから。集まってるから、ちょっと寒い時と思った。

* 幼児P：う～ん。秋。ちょっと待って。これは桜だから、あの～ちょっとだけ涼しいと、ちょっとだけ暑いを合わせた秋だと思う。《あ～。暑かったり涼しかったりする頃？》うん

* 幼児S：あったかい時。…寝ころんだりさ、外でご飯食べたりしてるから。寒いとできない。

5. 場面4について

この場面は、幼児にとって季節を感じにくい絵となっていた。理由としては前述のとおりリンゴという果物が常時目にするものであり、食卓にあがることが1つの要因であると思われる。場面5に描かれていたスイカが、多くの幼児から夏を表すものと認識されていたことと比しても、季節を感じにくい果物ということが、リンゴの特色として考えられる。一方、この場面に関しては、食べることに関する経験が多く語られた。この絵をリンゴと考えた幼児が多かったが、中には柿と認識したものも



おり、それぞれどのように食べたかや、嗜好の話題などを語った（幼児B、C、H、L、S）。このことから、幼児にとってリンゴや柿が身近な果物であることがうかがえる。幼児Cは、語りのはじめでは、「たくさんリンゴがあるので夏」と話をしてしたが、語りの中で他の食物について話をしているうちに、話題が「秋」にすり替わっていた。一見辻褄が合わない語りのように思えるが、幼児Cは食べ物について自らの経験を想起しながら、話すことそのものを楽しんでいると思われる。今回の改訂により幼稚園教育要領などに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたが、幼児Cの姿は「言葉による伝え合い」や「社会生活との関わり」などと関連深いものであると思われる。

幼児Lは、「何も証拠はないけど」と自分の考えを語った。「証拠」という難しい文言を用いた幼児Lの語りからは、人が物事を考える際に「なぜそう思うか」という根拠があるということを感じとっていることがうかがえる。

- * 幼児B：秋かな。リンゴがあるから 保育園の先生が教えてくれた。
- * 幼児C：これは夏。リンゴがいっぱいあるから。《リンゴは夏の食べ物？》うん、だって今日食べて来たもん。柿も。昨日食べた。あと、ブドウも食べた。果物だけと違うで、さんまとかもさあ、秋やで。
- * 幼児H：リンゴがあるから秋やと思う。お熱のときいつもリンゴ食べる。お母さんがスリスリしてくれた。
- * 幼児K：春 なんか赤い奴がある。おばあちゃんちにいろんな花とは植えてて、春にこういう赤いのがあったから。
- * 幼児L：涼しい時？何も無いけど、何も証拠はないけどわかった。リンゴ食べてる時やから、ぼかぼかの時か涼しい時やと思ったから。
- * 幼児S：涼しい時、柿があるから。給食終わったら、出るときある。でもさ、綺麗な柿が好きって言う子もおるし、Xちゃんはぐちゃぐちゃのが好きやって。

6. 場面5について

この場面も、幼児にとっては季節を認識しやすい絵となったようである。幼児Gの語りにあるとおり、夏には食べる機会が多く、夏以外の季節に店頭に並ぶことが殆どないスイカは、それがあるだけで季節を表す果物なのであろう。一方、スイカ以外の事物から季節を認識したものもいた。あるものは登場人物の服装(幼児A)から、あるものは空の色(幼児C)から、あるものは太陽の光の大きさ(幼児E、I)から、そして



数匹の虫の存在から、「夏以外の季節にはあんまり虫がおらんから」(幼児I)と季節を判断したものもいた。これらはどれも自らの経験を基に語ったものだと思われる。幼児期には実際に経験をする事の重要性が言われているが、本研究の結果からも、幼児が遊んだり生活する中で、季節特有の空模様を感じたり、虫の特性を知る機会となっていることが考えられる。

* 幼児A：夏と思う。半袖着てるから。

* 幼児C：これは冬？えっと　ここが冬みたい。色が冬っぽい(空を指さして)

* 幼児E：……夏。太陽がこう…なってる(指で太陽の光の部分をなぞる。)

* 幼児G：夏や。太陽があるし夏の一番おいしい食べ物はスイカやから。だってお母さんが夏になった時だけ、スイカ食べるから。太陽は、夏は暑いから太陽もいいかなって思った。……ひまわりもあった。

* 幼児I：これ夏やな。だって太陽デカいから。あとハチもデカいから。これはスイカかな。これは案山子とか。夏には案山子が多いから。《なんで?》ひまわりも咲いてるし。あとここに2人、蟻かな。他の季節にはあんまり虫がおらんからこれは夏かな。今の季節だとダンゴムシ2人くらいみつけたから。

7. 場面6について

幼児の語りからは、雨に関する実に豊かな表現が数多く見られた。「夏は雷が多いが、秋は雨が多い」(幼児C)、「雨から雪に変わる」(幼児F)、「すぐ忘れてしまう雨の日の名前」(幼児G)、「冬は雨が多く、雨が降ると虹が出現する」(幼児I)、「梅雨は連続で雨が降る日のこと、風が強いのは台風」(幼児M)、「理由は不明だが雨が降っている時は寒い」(幼児N)などがそれである。雨は幼児にとって身近な自然事象であり、降雨により戸外遊びができないなど自らの生活や遊びに直結することから、経験として蓄積され多くの語りが見られたと思われる。この場面は、梅雨時期、もしくは秋の長雨を表現したものと思われるが、幼児には少し難しい表現であると思われ、実際に「梅雨」という言葉を口にしたのはわずか2名であった。しかし幼

児は「冬の方が、雨が降る日が多い」や「冬と夏は雨がよく降る」などの自分のこれまでの経験から保持する基準によって、雨と季節の関係を理解している様子であった。

* 幼児C：これは雨…これなんかさあ。秋っぽい。雲が秋っぽい。色が。雨の時に。だってさ、夏の方が雷が多いけどさ、雨は秋の方が多いと思う。

* 幼児F：冬？だってな、雨から～えっと雪になるから。

* 幼児G：……名前知ってるけど、名前すぐ忘れる。雨の日の名前。これのこと。雨の…名前の

こと《えっと…「つ」がつく？》梅雨 お母さんから聞いた。梅雨は、冬とか寒い時期にあるかもしれん。春とか。保育園におる時いっぱい雨がふる。

* 幼児I：これなあ・冬は雨の方が多いからな。雨が降ったら虹が出るのが多いからな。冬か夏やな。《なんで冬か夏？》だって、冬とか夏は雨が多いから。今は台風で雨がいっぱい降ったから。だから、でもここに（キツネを指さし）ジャンパーがあるから、ちょっと寒いくらいかも。冬かな

* 幼児M：梅雨！いっぱい雨が降る日。あの、連続で降る時がある。《今日だけ降るのは違うの？》そういう時は梅雨じゃないけど、風が強かったら台風。梅雨は、長い時降る時もある。夏の前に梅雨があって、それが終わったら夏がある。何で知っているかわかんけどなぜか知ってることが結構ある。

* 幼児N：寒い時 雨が降ってるから…なんでかは分からへんねんけど、雨は降ってるときは寒い、寒いから。



8. 場面7について

場面7は、「分からない」と答えた幼児が最も多く、幼児にとって季節を認識しづらい場面であったようだ。一方、画面右下に小さく描かれた鯉のぼりに気付いた幼児は、春と答える姿も見られた（幼児C）。木の葉の緑色から季節を認識するものがいなかったのは、幼児にとっては木の葉＝緑というイメージが強く、自明のものとして感じているのかもしれない。

ハンモックに寝ている部分に注目した幼児の中には、暑いから外で寝ていると語ったもの（幼児D）と、戸外が涼しく心地よいことから外で寝ていると語ったもの（幼児L）がいた。また自らが経験した幼児や、家族旅行の際にハンモックに寝ている人を見た経験があることも語られた（幼児K）。

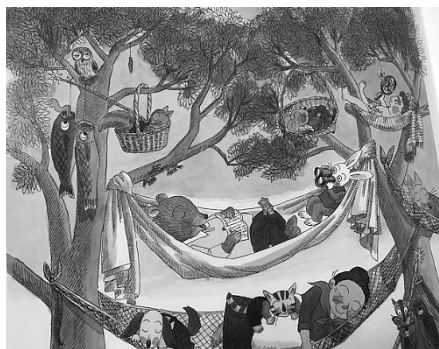
近年では、幼児も絵本だけでなく、DVDやタブレット端末など様々な情報機器を使用する

機会がある。本研究の対象児もそれらを視聴し、それらから得た知識によって、語りが生成されていることも十分考えられる。しかし、幼児自らが経験したことから生まれた語りには、家族や保育者、友だちとともに過ごした楽しさや喜びの記憶が紐づけされているのだろう。経験を語る際、幼児においても時に饒舌になり、高揚した気持ちで話す姿が確認された。

* 幼児C：これは夏っぽい！でも待って。鯉のぼりあるから違うと思う。鯉のぼりあるから春かな…たぶん春やと思う。保育園にあるよ、鯉のぼり。

* 幼児D：夏。お布団とか外に用意して寝てるから、暑い。暑いから外で寝てる。

* 幼児K：夏かな　なんかこんな奴、夏にこういうのしている人おったから。あの、お出かけしてる時に見る。いろんな場所行くから。冬とか夏とかはお父さんとお母さんとおばあちゃんとかみんなでお出かけいくし。



* 幼児L：次は？涼しい時。寝転んでるし。暑いときは寝転ばない。あってる？

9. 場面8について

この場面は、21名中18名の幼児が冬と認識していた。残り2名は秋、1名が不明であったことから、この景色からは寒さを感じたものが多かったと言える。しかし、語りの分析を行うと、季節の捉え方の根拠は様々であった。衣類（長袖、マフラー）から読み取ったもの（幼児C、G、I、N）、白い地面から雪を発想したもの（幼児J、P）、月のくしゃみや枯れ木を理由に挙げたもの（幼児F）もいた。またフクロウを理由に挙げたものが複数名いた（幼児F、I）。フクロウは場面1から9まで全ての場面に登場しているが、幼児らは暖かさを感じる場面ではフクロウに触れることはなく、場面8と9というどちらかという寒い時期と認識される絵において、フクロウについて話した。幼児の中には、フクロウを寒い季節と結びつけているものがあることが考えられる。フクロウはそれほど一般的な鳥ではなく、日常生活の中で見かけることはあまりない。幼児らは、絵本やメディアなどで目にしたものでイメージを作り、このような語りとなったのかもしれない。

* 幼児C：これ冬。だってマフラーつけてるから。雪も降りそうやから。こう見たら雪が降りそうやから（下方からのぞいて）あと、息が出てる。

* 幼児D：秋と思う。お月様がおるから。半分のお月様は秋に出るよ。

* 幼児F：冬！だってフクロウおるもん（月を指さしながら）これも「おほん」ってなっと

るし、ここも取れてる(葉っぱを指さし)

* 幼児G : …春か、夏か秋か冬…冬。夜やから寒そう、長袖着てるから冬やな。

* 幼児I : 冬! だってマフラーしてるから。あと〜ちょっと雪降ってる感じが。あと風がある。あと、冬にフクロウがおる時が多いから、夜に。《フクロウ見たことあるの?》動物園とかで。後は絵本とか。

* 幼児J : これは冬! だってここ。白い。くしゃみやってる。あと、白いから雪が。

* 幼児N : …曇ってる時。《寒いか暑いかっていうとどうかな?》わからん。《あ、そっかそっか。この人らは何やってるんやろうか?》マフラー。じゃ、雪が降ってるってこと? だってこの人はしてないもん。《どっちやろうかな。》あ、風が来てる。《ほんとやね。》この2人、寒くないんちゃうん。《ほんまやな。2人の笑い声》この人たち寒くないからマフラーしてないんか。ハハハハハ。《ナイスアイデアやね。ってことは、これ、寒い時?》う〜ん。曇ってる。《そうやね。曇ってるときやね》

* 幼児P : 冬! なんでわかったかという、ここにね、なんか雪みたいなのが降ってるの見える。ここ、風がある。お花さんが可哀想。夏だったら咲いてるのに、冬だから折れちゃってる。



10. 場面9について

場面9に関しては、秋と認識したものが11名と多く存在した。その語りの多くは草の色に言及したものであった。秋と答えた11名中8名もの幼児が草の色について話し、枯草から季節を感じ取っていたようだ(幼児C、F、N)。幼児の中では、春や夏には緑色だった草が、秋になると枯草になり、冬が来ると雪が積もるといったような定型化された思考があるようだ。調査をした園は温暖な気候の地域にあり、降雪は年に数回、ましてや積雪などめったに起きる事象ではなく、幼児が実際に目にしたことは数回ではないかと思われる。しかしながら、幼児の中には「秋は茶色、冬は白」といったいわば固定的なイメージを備えているものがある。これは、珍しい現象だからこそ見慣れた景色が白くなっていることが鮮明に記憶に残っているのかもしれないし、テレビ番組などで視聴した内容を記憶として保持していることも考えられる。

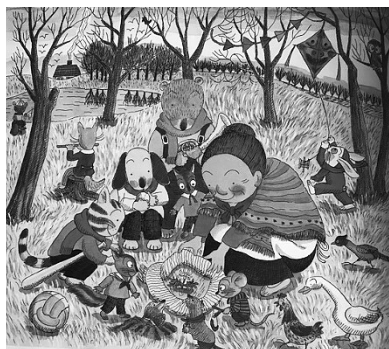
冬と捉えた幼児は、登場人物らが身につけているストールやマフラーから季節をイメージしたものが多かった(幼児O)。

* 幼児C : 秋 葉っぱが見えたから。あの、あのな、こういう色になるから。

* 幼児F：秋かな。(芝生を指さし) だってこの、茶色の葉っぱがあるもん。ザワザワって。フクロウもおるよ

* 幼児N：秋《なんで秋と思った?》あのね、あの…冬やったらここが白いやん。でも、ここは茶色やから。《あ～草が。茶色やからか。夏やったら何色になるんやろか》緑。

* 幼児Q：秋《なんで?》だってこれ着てるから。(ストールを指さす) あとネズミとかおるし。



IV. おわりに

本研究においては、幼児の季節の捉えを明らかにすることを目的に研究を行った。その結果、幼児が季節を判断する際には、以下のようなことに着目していることが考えられる。

1. 色相と明度

幼児の語りの中には、色相や明度からの情報で季節を捉えようとするものがあった。それは、例えば空の色や草の色、場面の暗さなど、季節や時間で変化するものについての語りであった。幼児らは、日々の生活や遊びの中で、このような自然が醸し出す色の変化に気付き、逃さず受け止め、自らの中に経験や知識を蓄積させているものと思われる。

2. 季節に適した衣類

登場人物が身につけている衣類から季節を理解している幼児もいた。

衣類は幼児にとって非常に身近な事物であり、自らの生活と密接に結びついているため、季節を捉えやすい対象であると思われる。

ところが9枚の提示資料をよく見ると、幼児たちが指摘した登場人物の服装、特に袖の長さにはそれほど大きな違いは見られない。肘の下まで袖を捲った状態のものも数枚あるが、それも半袖というほどの袖の長さではない。幼児らは画面の中の「別の部分」から季節を感じとり、その影響を受けて、同一の長さのものでも「半袖」と感じたり「長袖」に見えたりしているのかもしれない。しかし、「別の部分」について言語化することがまだ困難な時、自分がよく知っている言葉で表現可能な衣類に関する語りを選択し、話をしている可能性も考えられる。幼児に「どうして?」「なぜそう思う?」と理由を問い、言語化することを求めた時、語っていることが全て正しいとは限らないことがこの事例から考えられる。しかし、画面が持つその雰囲気や背景から「半袖」だと認識した子どもが語った言葉は、その瞬間においてその子どもにとっての真実であることを、私たち大人は理解する姿勢が必要であろう。

3. 季節の固定化されたイメージ

季節の捉え方として、幼児特有だと思われた語りがあった。フクロウやくしゃみ、咳、草木の色の変化などにおいて幼児は固定化されたイメージを保持しており、物事を判断する際にはそのイメージを用いて行っていることが考えられる。幼児期は、身近な様々な事象に触れ、理解することでイメージを作成している段階であろう。成長とともにこの固定化されたイメージは複層的になり、自らのイメージだけで、すぐにイコールで結び付けられないことを体験的に理解していくのだろう。

4. 自己の経験から生じた季節の判断

季節の捉えを問うた際の幼児の語りには、自らの経験が非常に豊かに表出された。家族や保育者、友人たちと過ごした中で共有した様々な経験は、幼児の内なる部分に深く蓄積し、時には驚きや不安などの感情も伴い楽しかった記憶として語られた。そこには、家族旅行や園の行事など大きなイベントはもちろんのこと、食べる、遊ぶ、会話など生活の中でのふとした断片が語られることも少なくなかった。それらの語りには、知識としては十分でない場合もあったものの、幼児本人にとっては、経験から不思議や喜び、不安など色々な感情が生じ、そのことを考え、解釈し、自分なりの答えを見出しているようであった。自らの経験を伴う語りには、知識から理解するだけでなく、身体や心を動かしたからこそ幼児の記憶に残り、話されたものもあったと思われる。知識をつけようとする際に、認知的な側面からのみのアプローチではなく、質のよい経験を蓄積させることが、幼児の学びの基礎につながると考えられる。

引用文献

- Einarsdottir, J (2007). Children's voices on the transition from preschool to primary school. In Dunlop, A.W.A & Fabian (Eds.), *Informing transitions in the early years* (pp74-87). London. Mcgraw Hill Companies.
- Griebel, W & Niesel, R (2000). The children's voice in the complex transition into kindergarten and school. *European Conference on Quality in Early Childhood Education "Complexity, Diversity and Multiple Perspectives in Early Childhood Services"*, London
- 肝付文子 (2011) 季節を題材とした保育活動とその音楽指導方法. *小池学園研究紀要*.9, 41-57.
- Ledger, E., Smith, A. & Rich, P. (1998) "Do I go to school to get a brain?" The transition from kindergarten to school from the child's perspective. *Children's Issues*, 2 (1), 7-11.
- 正岡さち・園野真紀子 (2015) 『幼稚園・保育所における壁面構成』の事例報告. *島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)*. 49, 107~111.
- 小澤和恵 (2009) 保育所・幼稚園実習で求められる音楽活動の考察—「生活の歌」と「季節の歌」について—. *埼玉純真短期大学研究論文集*. 2, 37-47.

さとうわきこ (1997) ばばあちゃんのマフラー 福音館書店

Smith, A. Taylor, N (2000) Children's Voices : Research, Policy and Practice. 4-6.

横井一之・齊藤公彦・小野克志・海老原孝一・金森由華 (2013) 領域「環境」における季節感の指導について―本邦幼稚園や保育園の現状、海外の幼稚園の比較も含めて―. 鈴鹿短期大学紀要. 33, 227-242

謝辞

調査にご協力いただいたA保育園の園長先生、先生方、そして子どもたちに深謝いたします。